幼児の思考と教育（二）

――幼児の道徳的実在性――

仲原晶子

一、幼児の世界観

さきに幼児の思考特質の全面をおおっているものとして幼児の自己中心性について述べ、したがって幼児の教育は必然的に自己中心性を軸として展開されねばならないことを説明した。それではそのような思考特質の上にきずかれる幼児の道徳判断はどのように特殊なものであり、それは教育の問題としてどのように取り扱われねばならないかということについての実験研究の報告が本論である。

幼児の「道徳的実在性」の説明にはいる前に、その背景となっている「幼児の世界観」について述べねばならない。数冊のピアジェの著書によってこれを概説すれば、要するに幼児の世界観は幼児の自己中心性から展開するもので、したがってここに幼児特有の世界観が生ずる。一口にいえばそれは、外的実在は幼児にとっておとなにおける場合のように純粋に外的でしかも客観的なものであるかどうかということについてである。第一の特色は幼児は自己と外界との明確な区別をもたない。したがって幼児は誰でもが必然的に自分とおなじように考えるものであると考え、自発的に他のものについて考えようとしないし、また自己の思考を証明したりまたは検査したりしようとはせず、まして普遍的な真実を探究し受容するということはありえない。そしてひたすらに物に関連していく。初期の幼児にみられる興味・ゲーム・絵がいずれも単に物の模倣に関するものだけであることがこれを証明している。つまり自己の内的存在をあたかも外的な実在であるかのように錯覚する。たとえば思考・ことば・夢というような明らかに主観に属しているものを客観性をもつもののように考え、それが実在であるというような表象を生ずる。これを幼児の「実在性」(realism)という。六、七才までにみられる実在性の著しい例は、ことばや名前を物そのものと混合する。物の名は、物そのもののうちにあるのだと考える。字らしいものを書き

初めた幼児が、例えば花火の絵をかいてその横に何やら字らしいものが書いてあるのを質問すると、「はなび」と書いてあると答える如きはこれである。はなびの文字は、花火のつたない絵の説明でも何でもなくて、それは花火という物と名をどうしても分離させることができないのが幼児なのである。幼児はさらに夢と現実を混同する。夢が純粋に自己のみに関わるものであることを知らないで、真実で客観的な実在であると考え、夢をも物そのものの中に定位する。筆者の子ども（五才男幼稚園児）とのある日の会話

〃僕はみよちゃんとこんなお約束した……〃

〃みよちゃんってだあれ。おうちはどこなの。〃

〃……〃

〃どこにいるの。〃

〃あのね、僕のむねの中にいる子なの。〃

夢か幻か明らかに想像上の人物が実在として出現したのである。さらにこれらの場合から考察されるように幼児の実在性は関連とまじないの二つの感じによって拡大される。関連というのは空間的接触もなければ明白な因果関係も認められない二つの現象を部分的に同一のものとみるかまたは相互に直接的影響があるとみるかのいずれにせよ客観的には無関係な二つの現象の間に関係があると信ずることであり、この関係によって実在を変更しうると信ずるその方法をまじないという。幼児は実によく数える。数えつつ石をとぶ。細い線上を歩む。目を閉じて十よむと大抵のことは成し遂げる。何かを獲得する時、不幸を忌避する時数えることによって願望を達しようとする。この場合「獲得する何か」「忌避する不幸」といっても客観的にみれば「とんでもないこと」が多い。例えば幼児が両親やまたは自己の死についての恐怖にさらされていることが多いということをピアジェも指摘しているがこれもさきの子どもとの会話、

〃子どもはおとなになる。おとなは年寄りになる。年寄りは死ぬ。そうでしょう…ね。〃

〃まあ、そうですね。〃

〃それではうちで僕が一番小さいから皆死んでしまって僕ひとりになったらどうしよう。〃

数えることはいずれもまじない的要素を多分に持っている。数えることは実在を変更する手段となり、そこにおのずから関連が認められていることは明らかである。この実在性の結果としての関連とまじないはさらに幼児の世界観の第二、第三の特質である「汎心性」(animism)、「人工性」(artificialism) へかかわっていく。アニミズムとは、さきのレアリズムとは逆に幼児は自己と客観の区別が明瞭でないために明らかに客観に属するものをどうかすると主観に属するもののように考えることで、ために凡ての物に生命や意識が付与されることになる。さきの関連やまじないの感じは、このようにすべての物に意識や生命を見いだし、それを自分自身の意識や生命

と同一視することから結果する場合が多い。六、七才までのアニミズムはすべての事物に意識があり生命があるものだとするが、次の段階では動くものだけが意識的であるというふうに発展していく。幼児にとっては太陽が笑い、月が泣く、自己をとりまく万有ことごとくが語りかけ歌いかけ、中に坐してまじないを唱えれば実在は意のままに変化するというお伽噺そのままの世界に住んでいるという一面をもっていることになる。さらに幼児の自己中心性は、これら万有の一切を人間が創ったものだと考えておりこれを「人工性」とよんでいる。

注、実在性は実在論または実念論、汎心性は汎心論または物話論、人工性は人工論といわれてきたが、私共の研究室では、幼児がその傾向として実在論的な面を、汎心論的な面を持っているというところからそのような傾向を幼児の実在性、汎心性、人工性とよんでいる。

二、実　験

一、日時　昭和三三年一月〜四月

二、対象　西宮市・宝塚市における私立幼稚園二、私立保育所一、私立小学校一、二年生（四才〜九才）より六四名を無選択に採用した。

三、実験者　仲原晶子

四、方法　ピアジェが実験に用いた例話を部分的に改め、臨床法により個別的実験をした

五、結果　幼児の道徳は実在的傾向――実在性をもち、それを便宜上パーセンテージで示すと年令により上表のような状態でそれの解除へ向かっていることがわかる。参考に自己中心性系数をも併せ記入した。

年令	自己中心性系数	実在的傾向
4才	54	56%
5才	37	56%
6才	12	34%
7才	—	42%
8才	—	24%

注、**実験に用いた例話**

一、過失に関する例話

(1) A、太郎という小さい男の子がお部屋のなかで遊んでおりました。食事に呼ばれたので食堂（茶の間）へ入っていきました。ところが扉の後に椅子がありまして、その椅子の上にお盆があって、そのお盆にはコップが十五個のせてありました。太郎はその扉の後にそんなものがあったとは知らないで扉を開けましたので、コップは十五個ともみんなこわれてしまいました。

B、次郎という小さい男の子がいました。ある日、お母さんの留守に戸棚の中のジャムを食べようとしました。そこで椅子の上にあがって腕をのばしましたが、ジャムは高すぎて手が届きません。無理に

取ろうとした時、傍の一つのコップにさわったので、そのコップは落ちて割れました。

(2) A、一夫ちゃんという小さな男の子がいました。お父さんが外出したので、お父さんのインク壺で遊ぼうと思いました。はじめはベンで遊んでいましたが、そのうちにテーブル掛に少しインクをこぼしてよごしました。

B、武ちゃんという小さな男の子がお父さんのインク壺が空になっているのを見付けました。ある日、お父さんが外出した時、そのインク壺にインクを入れて、お父さんが帰って来た時、喜ばせようと思いました。しかしインク壺をあけた時、テーブル掛を大きくよごしました。

(3) A、マリちゃんという小さな女の子がいました。お母さんを喜ばせてびっくりさせようと思って布を裁ちましたが、鋏の使い方を知らなかったので、自分の着物に大きな穴をあけてしまいました。

B、チカちゃんという小さな女の子がある日、お母さんの留守にお母さんの鋏を探し出して、しばらくそれで遊んでいましたが、鋏の使い方を知らなかったので、自分の着物に小さな穴をあけました。

二、盗みに関する例話

(4) A、三郎さんにはたいへん貧乏な小さな友だちがありました。この小さな友だちが三郎さんに、家に何も食べるものがないから今朝はごはんを食べなかったといいました。そこで三郎さんはパン屋に入っていったが、お金がないので、パン屋が向うをむいている間に、パンを一つ取りました。そしてそのパンを友だちにやりました。

B、明子ちゃんがある店に入っていった時、テーブルの上にきれいなリボンがあるのをみて、さぞ自分によく似合うだろうと思いました。そこでお店の人が向うをむいた時にそのリボンを盗んでさっさと逃げてしまいました。

(5) A、健ちゃんには籠の中で鳥を飼っている小さな友だちがありました。健ちゃんはこの鳥がかわいそうで、何時もそれを逃がしてやるようにとその友だちにいっていましたが、その友だちは逃がしてやりません。そこである日、友だちがいない時にその鳥を逃がし、これからもう籠の中へ閉じこめないように、その籠を屋根裏にかくしてしまいました。

B、克ちゃんはある日、お母さんのいない時にお母さんのところからお菓子を盗んできて、それをこっそり食べてしまいました。

三、嘘言に関する例話

(6) A、ひとりの小さな男の子（あるいは小さな女の子）が街を歩いていたが、大きな犬に出合って非常に恐れました。それから家に帰って牛程もある大きな犬を見たと、お母さんに話しました。

B、ひとりの男の子が学校から帰ってお母さんに、先生が良い点をくれたと話しました。しかしそれは本当ではなく、先生は良い点も悪い点も何んにもくれませんでした。ところがお母さんはたいへん喜んで、御褒美を下さいました。

(7) A、ひとりの男の子が部屋で遊んでいました。お母さんが入って来てお使いをいいつけました。しかし出て行くのがいやなので、足が痛いから行けないとお母さんにいいました。しかしこれは本当ではな

くて、足はちっとも痛くありませんでした。

B、ひとりの男の子が自動車に乗りたくてたまりませんでしたが、誰も乗せてやろうといいません。ある日街できれいな自動車をみて、乗ったらどんなによいだろうかと思いました。そこで家に帰ってから、自動車に乗った人が車を止めて一廻りさせてくれたと話しました。しかしこれは本当ではなくて、その子の作り話でありました。

(8) A、ひとりの男の子が図画が下手でしたが、上手に描けるようになりたいと思いました。ある日、他の子どもが描いたきれいな絵をみていたが、「これは僕が描いた絵だ」といいました。

B、ひとりの男の子がお母さんの留守に鋏を持って遊んでいましたが、それをなくしてしまいました。お母さんが帰った時、その子は、「鋏を見なかったし、触りもしなかった」といいました。

(9) A、ひとりの子は方々の街の名をよく知らなかった。本町通りがどこにあるかを知りませんでしたが、ある日、ひとりの人が街で立ちどまって本町通りはどこかと聞いた時、教えましたがそこではありませんでした。そこでその人はすっかり道を間違えて、探している家を見つけることが出来ませんでした。

B、ひとりの子は方々の街の名をよく知っていました。本町通りを聞かれた時、だましてやろうとして違った通りを教えました。けれどその人は道を間違わず、探している家を見出すことが出来ました。

三、幼児の道徳的実在性およびその取り扱い

幼児道徳性の心理学的構造を追求すると、幼児はその特有のレアリズムによって道徳的思考をも「道徳的実在性」として、いいかえれば実在するものとしての道徳性の認識をもつことが発見される。ピアジェはこれを次のように説明する。子どもがゲームなどの規則にどれだけ尊敬を払っているかということから子どもの道徳性の本質をみていくと子どもの道徳には二つの型があることがわかる。一つは拘束の道徳、他律の道徳であり他は協同の道徳、自律の道徳である。一方は客観的道徳他は主観的道徳ともいうことができる。前者は協同の意識を加えることによって発展し後者へと進化するものであると。そして前者を幼児特有の「道徳的実在性」とよんだ。道徳的実在性は児童の自己中心性から結果するものであることは勿論たがそれに加えて幼児特有の両親の絶対視、おとなへの一方的尊敬、それに拍車をかける両親の過保護から生ずる。そこで幼児は義務とか価値とかいうものを自己に対して存在しているもの、自己とは別に独立しているものと考え、それをおとな――主として両親――の知的拘束によって成立させる。道徳的実在性を明らかにするために三方面からその特性をあげると、

(1) 道徳的実在性においては、義務は本質的に他律的であり、おとなや規則に対する服従の行為は一切善であり、これに適応しない

行為はすべて悪である。

(2) 規則を守るというのは決して本質的にその精神においてなされるのではなくて、おとなの拘束であり自分に押しつけられるものと考える

(3) 道徳的実在性は客観的責任の概念を引きおこす。幼児は規則を文字通り守り、服従ということばにおいてのみ善を意識し、行為をさせた動機は問題でなく既成の規範を正確に守ったかどうかという結果によってその行為を評価する。そこから幼児の道徳判断における最もいちじるしい表示とみられる客観的責任が生ずる。そこで幼児の道徳的実在性をみしる規準として逆にこれを利用する

この第三の特性によって本実験は成立する。「過失」「盗み」「嘘言」に関する例話を準備し、これらの一問題はそれぞれ二つの例話からなり、一方はその動機は善であるが結果は他に比して悪く、他は動機は前者に比してよくないが結果においては前者に勝るという具合に一対をなしている。これを比較させて何れが何故に他者に勝るかをたずねると、幼児は内面的な自律的な動機に対しては全然これを無視する態度をとり外面的に実在として表わされた結果をのみ重視する。しかもその判断の規範は「お母さんにしかられるから」ということにある。これが客観的責任の道徳であり、さきの実験に示された道徳の実在的傾向である。

しかし一つの規範としての道徳は自ら自律的なものでありその行為に対する責任が主観に自覚されるものでなくてはならない。この意味からは幼児の道徳的実在性はいわゆる道徳とは区別されねばならない。全然道徳を持たない幼児がやがておとなとの交渉を持つに至った時、周囲のおとながある行動に対してなす反応を幼児は感情を通して経験する。これを反覆して一つの規準や規範をもつようになる。したがってそれは家庭および両親と子どもとの結合した性質によって形成されるものと考えうる。幼児は自己中心性の故にありのままの現実を模倣し、その道徳規範は両親を媒介として絶対的傾向をもち、したがって個々については具体的であるが決して一般化を意図しない故にその道徳には適応性がない。ここに道徳形成に関する教育上の問題として子どもの規範たるべき周囲のおとなのあり方が問題とされ、またこのような特性をもつ幼児道徳に対する取り扱いのいかんが発展の方向を決定する。この実験から理解されることは、保育所と幼稚園の比較において問題の理解では保育所の幼児の方が勝るが、実在的傾向は保育所の方が高いことから環境差が現われるということと、幼稚園児には日常経験に「よいことをしてほめられる」ことはあっても「悪いことをしてしかられる」という実感にうすく、むしろ「お母さんが心配する」というようなことを規範としてうけとっているということだ。実験方法にも問題はあろうが同時に幼児取り扱いの実際問題の上に大きな暗示を与えている。